
地を這う獣は甘い夢を見る

八笠珠香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地を這う獣は甘い夢を見る

【Nコード】

N5073U

【作者名】

八笠珠香

【あらすじ】

『地を這う獣は恋に憧れる』の短くなると思いますが、続編です。コスプレを楽しんでいたはずなのに、気付けば、異世界にトリップしてました。本能のままにもふもふ危険な人狼を手なずけて、コスプレ会場（だと本人は思ってる）から連れ出されたところから、話は始まります。そこが異世界だと彼女が気付くのはいつなのか！？そんなコメディ要素を多分に含んだ恋物語？です（笑）

地を這う獣は想人に出会う

世の中には夢と萌えがつまった場所があるのです。

かくいう私もそんな夢の世界の住人です。あ、ここ笑うところ。皆の前では、そんな世界微塵も知りませんって顔してるけど、ごめんなさい。

正直に言います。

私実は隠れおたくなのです。いわゆるコスプレイヤーというものなのです。

男の夢とかいうナース服とか制服には全く興味ないんだけど、メイド服には興味あります。

でも一番は二次元世界の凝った服が大好きなのです。もうだって可愛いじゃない！

それで、ついその世界に足を踏み入れちゃったわけなんだけど、年に二回開催される大型コスプレイベントに参加していた私が、まさかそこで、三次元ログアウトするなんて誰が思う？ 普通思わないよね。

「あなたが信じようが信じまいが、我らは確かに今魔界にいます」

・・・そんな真実、知りたくもなかった。

時は少しだけ遡る。

年に二回開催される、大型コスプレイベントに参加していた私は、そこで物凄い精巧な作りをした狼人間のコスプレ衣装を身を包んだ大きな体躯をもつ人に出会った。

そのあまりの精巧さに、我も忘れて触りまくったら、何故かいきなり肩に担がれて、レベルの高いコスプレ会場から無理矢理退場させられた。あれー？

もう少し周囲の人達をじっくり見たくて残念だったけど、まずはこの特殊メイクの人と仲良くなるってのもありかなと考えて、今私は大人しく彼の背中にしがみ付いている。

人狼の彼が身にまとう黒地のマントは厚手なのに、触った感じは滑らかで、動きやすさも考えられてるようだ。

んー、本当これだけでも高そう・・・

そういえば、ジーヴィストとか呼ばれてたけど、コスプレネームかな？

そんなとりとめのない事を考えながら、どこにいくんだろうとふと疑問に思う。

彼の動きにあわせて振動を与えられるおなが、そろそろ痛みを覚え始めた頃、大股で歩いていたら彼がふいに立ち止まった。

「・・・お前は、オレが・・・？」

何か小声で問われたようだけど、担ぎ上げられている格好のままよく聞こえない。

何だろと首を傾げているうちに、もう一方の腕が腰のあたりにまわったかと思うと、体勢を変えられ、次の瞬間には両脇の下に手を入れられ、彼の前に吊るされるように抱えられていた。

子供が高い高いされるような、あれだ。

この年でやられると、自分の体重の重力が脇にかかって、結構痛いという事を初めて知った。

けれどそんなことより改めて、真正面からその狼顔に見つめられ、おおつと感動する。

何度見ても素晴らしい出来だ。

中に人の顔があるせいもあって、狼の顔は私の倍はでかい気がする。

ぶらりと下ろしたままだった手を上げて、そつと触れると先程と同じ少し硬くて、体の中心にいくほど柔らかい毛に指先が埋もれる。彼の肌の熱が伝わって、少し温かい。

本当、こういう特殊メイクなんですか、これ。

首の下あたりをさつきは勝手ながらに堪能させてもらったので、今度は頬のあたりの、よりふつくらとしたところをわしわしと触ってみる。

素晴らしいです、もこもこの毛の感触。溜まりません。

そして、次に私が興味が出たのは、耳。

犬や猫を触るときは、相手が触ってもいいよーって空気を出してたら、そこはもう遠慮しない。

嫌がられない程度に、思う存分触るのが私の心情なので、彼の様子を伺いながらも、私は時折ぴくぴく揺れる耳に釘付けだ。

深い藍色の中にある黒の瞳孔が、ぴたりと私に焦点を合わせているのだけれど、そこから少なからず戸惑いの視線を感じて、私は愛想笑いを浮かべた。

不躰に触りすぎちゃったかな？

触っていいよ的な空気を感じたからつい触ってたんだけど、実は内心、この特殊メイクが壊れたらどうする！ 修理に数百万だぞコラ！？ なんて思ってたらどうしよう！

「・・・あの、もう触ったらダメって事？」

いい子ぶりっ子よろしく、首をかしげてみたりして。

そう尋ねたら、狼の目はまた二度瞬いた。

再度私と目を合わせてから、軽く俯く。

「・・・構わない」

それって触っていいって事だよね？

やったーと内心の喜びに、にやけた笑みになりながら、狼の耳に手を伸ばす。

ほかの部位より繊細で短い毛に覆われた大きな耳が、私の手が触れた瞬間、ぴくりと大きく揺れる。

そんな細かな設定まで、本当よく出来てるなあと感じながら、私の片手程の大きな耳を揉みこむように触った。

たまりません・・・！

こういう感触のぬいぐるみとか、なつかしのファーストラップを思い出す。

うーん、ずっと触っていたい。

遠慮なく、両耳同じように触っていたら、彼の全身の毛がふくふくと揺れている事に気付いた。

狼の目も細まり、気持ち良さそうな顔に見える。

そこで私は、またもや本物の犬と戯れている感覚に陥り、その大きく柔らかな毛に覆われた顔に自分の頬を摺り寄せた。うりゃうり

やーって、ついね。

動物には、つい全身で好きを表現しちゃう私なわけで、大抵そうすると、猫は嫌がって離れちゃうんだけど、一旦離れておきながら、しばらくするとまた擦り寄ってくるのがもう・・・

あの全身ツンデレ可愛すぎる・・・っ！

なんて、全然関係ない事を思い出し、ぎゅうつと抱きしめるように柔らかな狼の顔に更に頬を擦りつけた時だった。

「!？」

がくんと落下するような衝撃にみまわれる。

何！？ と思った次の瞬間には、焦ったように伸びてきた大きな腕に抱き込まれ、尻餅はつかずに済んだんだけど、腰がぬけたように膝から下に力が入らず、ぽかんと顔を上げる事しか出来ない。

「び、びつくりした・・・」

私を抱える狼の毛に覆われた太い腕に掴まり、体勢を立て直したところで、人狼の更に戸惑いを含んだ目と目があった。

そのまま狼の顔が近付き、すんすんと小さく鼻をならしながら、首もとの匂いがかがれる。

長い毛先が肌先をかすめるものだから、くすぐったくて笑い出してしまいそうだ。

でもちよつと待って、今日は結構汗をかいてたから、私今もしや女として間違った匂いしてるんじゃない？

あれ、もしかしていきなり手離れたのも、私がぐりぐりくつついてる時に、その匂いでこの人が、くさっ！ ってなったからとか？

そして、今、その匂いを怖いものみたさのように、再確認中だったりする！？

そんな事恥ずかしい事、やーめーてーっ！

と、慌ててその顔から逃れようとした時、かぷりと肩口をかまれた。

今日の私の衣装は、肩を思い切り露出していたもののため、地肌に歯の感触が伝わる。

痛くは無い。いわゆる甘噛みという力加減だ。

驚いて目をむく私の肩口を、狼の口は何度かかぷかぷやった後、今度は位置をずらして首元に噛み付いてきた。

「ひゃっ！」

首はダメっ！ 首は弱いのよっ！

思わず変な声がもれちゃうくらいに、首触られるとぞくぞくくすぐりたいの！

狼の大きな口が、柔らかな首の肉を確かめるように、歯を立てないように噛む。

その強すぎる刺激から逃れようとのけぞったら、更に首の全体をその大きな口でかぷりとされた。

「・・・やうっ！ ちよっ、まっ・・・あうっ・・・って、コラッ
！！」

「っー！」

かぷかぷされるだけならまだ良かったんだけど、いや充分に恥ずかしい高い声あげちゃいましたけどね、最後はべろりとその長い舌で舐められたので、思わず怒るとびたりと止まって狼が顔を上げた。

狼の大きな耳がしゅんとうなだれている。

藍色の目が困ったような、何で？　みたいな目になっている。

そんな可愛い反省顔を作ったって、許しません。

ていうか、どんだけ精巧な作りしてるのよ、マジで。

舐められた感触がまざまざと残る首元に手をあてると、濡れていて更に驚いた。

いや思い出せば、舐められた時ぬめつとした。本物の舌のように、こつ・・・って、その感触を思い出すと、鳥肌が立ちそうになったので、思考をシャットダウン。

この狼顔の奥にある顔の隙間からでも、何かしたんだろう。テーマパークでキャラクターからキスされた時に、本来なら聞こえないはずの「チュツ」っていう音が聞こえるように仕込まれているような、そういうった何かがこれにも仕込まれているに違いない。きつとそうだ。うん。

傍目から見ても狼にしか見えないうえに、そんなところにまで細工するとは、なんて芸が細かいんだ。

「首は嚙んじやいけません」

「・・・そうなのか？」

「そうです。・・・それに、臭いなら臭いって、その言ってくれるほうがありがたいっていうか・・・」

ああもう、誰かお願い、今すぐ私にデオドラントスプレー持ってきて！

そう切に願う私の前で、人狼は少しだけ首をかしげて、再度私の首元に顔を寄せた。

すんつと先程と同じように鼻を鳴らす。

だから、匂いかいじゃダメだつてば！

焦った私が制止の声を上げるよりも先に、彼が口を開いた。

「臭くは無い。何か、・・・ああ、うまそうな匂いをする」

「え」

・・・何その例え。

私お昼まだだから、食べ物臭がするって言われても、困るんだだけだ。

困るっていうか、女として、女として・・・！

愕然とする私に、彼が慌てて言った。

「安心しろ、お前の事は喰わない」

そんな、全くのフォローになってない言葉を言われても、全く嬉しくない。

がつくりと頂垂れると、人狼からそわそわしたような、焦ったような気配を感じた。

自分でも間違った事を言ったと気付いてくれたのだろうか、そうだったらしい。

「本当だ、お前の事はそういった目では見ていない」

・・・どうやら、気付いてないらしい。

というか、どういう話だ。もしかして、あれかな？

コスプレしてる人って、そのキャラになりきっちゃう人もいるから、この人もそれ系なのかな？

私はどちらかというと普段は出来ない可愛い服装をしたいってい

うので、始めたからその心理はいまいちよくわからないけど、否定するものでもない。

傍から見たら、同じ穴の貉むじなでしかないしね。

そうとわかれば、必死な様子で大きな耳を垂らし、毛をふくふくさせながらこっちの様子を伺う態度も言動も許してあげようじゃないか。

「わかったわ。臭くないならいいの」

「ああ、淒く、いい匂いがする」

よくわからないけど、まあ良しとしよう。

相手はとにかく人狼になりきりなんだから、少しはこっちものつてあげなくちゃね。

「ありがとって言うべきかしら？ でも本当に食べないでね。私なんて美味しくないから」

「ああ、喰わない」

「そう良かった。でも私はおなか空いちゃったから、ね、さっきの会場に戻らない？」

大きな会場だったし、飲み物のサービスもあったりしたから、どこかで食べ物も用意されてるか、または近くに売店でもあるだろう。そう思っただけで提案だったんだけど、彼は複雑そうに鼻筋に皺を寄せた。

「・・・お前の種はやはり、あのような場所の力を借りねばならないのか？」

「？ よくわからないけど、普通そうでしょう？」

コスプレのまま外に行くわけにもいかないし、今私たちが今いる

のは、まだたぶんその会場のある建物のどこかと思うんだけど、見渡した感じ、がらんとした広い通路で人の気配が無い。

つまり、このままでも入れるコンビニも売店もないという事だ。それなら戻った方がてっとり早いと思っただけだ。

「お前の種ならば、俺から取る事も可能なのでは？」

さっきから何度から出てる『しゅ』って何だろ。

もしかして、コスプレキャラ設定の事でいいのかな？

一応、今回の某ゲームのサキュバスキャラだ。

彼が人狼として話しているというのなら、私をそのキャラとして見て、話しているという事で間違っただけだから、ここはどう会話にのるべきか。えーと・・・

「・・・それもいいんだけど、今日はいつもののが食べたい気分なの。ダメかしら？」

どうだ！ 我ながら渾身の切り返しだろう。

「・・・そうか」

渋々ながらも彼は頷くと、私を抱きしめていた腕を離れた。

出会ってすぐに自分からくっついていただけに慣れてしまっていたけれど、初対面の男の人にいきなり密着しまくりって普段だったら、ありえないな。

それだけ、この人のコスプレが精巧で、人間の男というのを意識させないからなんだよね、きっと。

彼の大きな歩幅に合わせて、小走りになりながら、ふと視線を感じて顔をあげる。

「飛ばないのか？」

「え？」

「羽があるのだから、飛んだ方が早いだろう。俺もそれに合わせる」

私の腰にくつついている羽を指差しながら、彼が言う。

うう、どこまでその人狼キャラでいくつもりなのよ。

私のはそっちみたいに毛がふくらんだり、耳が垂れたりと特殊機能はそなわってないの、わかるでしょう、流石に。

そう思ったけれど、彼の設定に合わせようと会話にのつたのは私自身だ。

こうなったら、とことん付き合ってやるわよ！

「これは動かないの。悪い魔女に呪われてから、ただの飾りなのよ。飛べたら便利なんだけどね」

どんなキャラ設定だ、私。

自分で言ってる恥ずかしいと、思わず遠い目をして溜息を吐く。

そんな私をどうとつたのか、彼は痛ましいものを見る目をした後、その毛で覆われた大きな手で、私の蝙蝠羽に軽く触れた。

「触っちゃダメ！」

思わず大きな声を出してしまった。

人狼が慌てて手を引つ込める。

「すまない、・・・痛むのか？」

「そうね、壊れたら痛いわ・・・」

主に金銭的なものが。

「・・・そうか。許せぬ。その魔女の顔は覚えているのか？ 居場所でもいいが」

低く唸るような声音に、目を瞬かせた。

「どうするの？」

「決まっている。呪いを解かせるんだ」

ここまでキャラを通すなんてある意味、凄い。

私も段々楽しくなってきた。この場に私たち二人しかいないから、ノリにのってきたって感じ？

こんなの友達の前じゃ絶対無理だ。

一瞬素に戻って、声を上げて笑いそうになりながら、なんとか苦笑して堪える。

「ありがとう。優しいのね」

「・・・そんな事を言われたのは初めてだ」

「そう？ あなたは優しいわ。好きなように触らせてくれるし」

私だったら、そんな精巧なコスプレ衣装、壊されるんじゃないかとドキドキして絶対触らせない。

「あ・・・ああ、その、好きに触ってくれて構わない」

「ふふ、ありがとう」

呪いを解くというのなら、今度は私のこの羽もグレードアップして作ってくれないかな？

なんて事は、もうちょっと仲良くなってから、お願いしてみようか。

そう私が思ってるなんて彼は気付きもしていないように、嬉しそうに全身の毛を膨らませてそわそわした気配を漂わせている。

思い切り見上げないといけない程、大きな体躯をしている彼から伝わるそんな気配に、私は思わず笑みを零しながら、二人で歩くのだった。

地を這う獣は想人に出会う（後書き）

ちなみに、作者はコスプレとか一切やった事ないです。友人にコスプレ画像見せられて、可愛いなー凄いなーと思って妄想したら、今回のお話が出来上がりました。稚拙ではありますが、お付き合い頂けると嬉しいです^^

地を這う獣は独占欲を覚える

「おや、あなたの魔力がこちらに戻ってくる気配がするので、何の間違いかと思っていました。が・・・まさか、本当に戻られるとは・・・
・お早いお戻りで」

会場に戻るなり、その声をかけてきたのは先程、ジーヴィストと話していた肌を青色に染めた燕尾服姿の男の人だった。

目を細めた作り上げられた笑みに、人狼の鼻筋に皺がよる。

「アーシユラ様が知れば大変お喜びになりますね。先程、姿を見せた事をお話した際に、とても残念がっておられましたので」

「アレなら既に俺に気付いているだろう」

「まあそうでしょうけどね。あなたの魔力は良くも悪くも、目立ちますから」

ノリにノツた会話をするものと感心しながら彼らの会話を聞いていた私だけど、周囲から向けられる視線にふと気をとられて辺りを見渡した。

周囲の人たちは、先程と同じ様に何処か遠巻きに人狼の彼こと、ジーヴィストの事を見ている。

その視線が気にならないといえは嘘になるけど、まあ、レベル高いコスプレする人ってどうしたって近寄りがたいよね、と思い無視する事にした。

私からしたら、皆様のコスプレも充分凄いつて、拍手喝采できるレベルなんだけどね。

でもまあ、そんな事より、おなががすいたなあ・・・。
大抵、端のほうで小さな売店があったりするんだけど、何処だろ

う？

そう思って、会場の奥のほうへと視線をさ迷わせると、かなりの広さがあるらしく人ごみもあって、何処に何があるというのはいく見えな。

窓から差し込んでいた夏の暑さを伝える強い日差しも、今はカーテンが幾重かにかけられていて、室内はひんやりと涼しく、少しだけ薄暗く感じる。

一瞬にしてここまであの会場が様変わりするって、本当なんか変な感じ。

唇のあたりに指をあて、んーっと考え事をしながら、きよるきよると辺りを見渡す私を他所に会話していた二人の声が聞こえた。

「・・・この食が終われば、すぐに出ていく」

「ああ、その方が今回の餌をご所望なのですか。なるほどなるほど」

ちらつとジーヴィストが視線を寄越したので、一瞬彼を見上げてから、作り上げた笑みのままこちらを見ている青色の青年に対して私も笑みを作り上げ、軽く首を傾げるように挨拶する。

運営側っぽい人だから、愛想笑いしておいた方がいいよね、と思っただけだ。

「そうですね、本来なら・・・いえ、ジーヴィストがこの場に参加しているというだけでも、此度の招宴は充分の価値があったといえますから、細かい事は気にしない事にしましょう」

「俺は参加するつもりはない。それに、何の事を言っている？」

「いいえ、私事ですのでお気になさらず。私は楽しければそれでいいのです、何事もね」

そう言って、青年は更に笑みを深めると、一步私の方へと近付き片手を胸にあて、優雅にお辞儀を試みせた。その姿勢のまま、顔だけを軽く上げ私に視線を合わせる。

金色の瞳が、楽しい遊びを見つけた子供のように、きらりと輝いたように見えた。

「私はツエーザレと申します。どうぞ、お見知りおきを」

「あ、私はユーアといいます」

「・・・ユーア？ ユーアとお呼びすれば良いのですか？」

背を戻しながら、ツエーザレが不思議そうに少しだけ首を傾げる。

「え、はい。ユーアと呼んで下さい」

一応、SNSに登録するときに検索かけてみたりして、少しでもかぶらないような、でもやっぱり可愛い名前にしたくて考えたんだけど。

まあ、同じコスプレネームになっちゃうのとかってよくあるし、気にしてないけどね。

「そうですか。まるで人間のように真名を隠すんですね、あなたはいや、面白い」

ふふつとツエーザレが口元に指先をあて、微笑する。

彼の言葉の意味がいまいち解らず、特に『まな』って何？と思うたけれど、とりあえず笑っておいた。

これもきつとキャラになりきった、何かの会話の続きなんだよね、きつと。

友達と出会うまでは、私もとりあえずのってはおくけどさ、こう長いといつまで続くんだろ？って、ちょっと思っちゃう。

でもここまで徹底してるってことは、きっとコスプレ脱ぐまでやりそうだよな。

「流石はジーヴィストが選んだ相手といいますが、いえ、最初はおなたから彼に歩み寄ったのですから、やはりあなたが特別なのでしょうね」

そう言いながら、彼はまた一步私に近付くと、そつと私の手を取り指先に口付けた。

普段の私だったら、ぎょえーとか思う仕草だけど、この格好してる時の私は違う。

煌く金色の瞳を、余裕の笑みで見返した、その時。

横から強い力で引き寄せられて、ツェーザレと触れ合っていた手が離れる。

驚いて顔を上げれば、人狼の顔が怒りに満ちていた。鼻筋に皺が寄り、大きな口から牙が見える。

「これに触れるな」

地を這うような低い声音に、目を瞬かせた。

狼の怒った顔って、こんな迫力あるんだ・・・！

そんな突拍子も無い事を思う私の前では、ツェーザレが愉快そうに笑っていた。

「ああ、私だけこのように愉しんではいけませんね。集まって頂いた皆様に申し訳が立ちません。皆様のためにも、そしてユーアのためにも、食事の時間を早める手配をしましょう・・・。そんなに睨まないで下さい、只でさえあなたの顔はたちが悪いので

すから」

何気にひどい事をさらりと言ったよね、この人、今。

隣を見上げれば、狼の大きな耳がぴくぴくと揺れている。

目も先程の怒りに満ちたままに、細められている。

これが本当の狼か犬ならば、今頃飛び掛ってるんじゃないかと思えるほどの迫力だ。

「ではまた後ほど。どうぞ今しばらくお待ち下さい」

言って、ツエーザレはまた優雅にお辞儀をすると、人ごみへと消えていった。

彼の姿が見えなくなってから、隣で陰鬱とした雰囲気を漂わせているジーヴィストを見上げる。

ぽんつと彼の大きな腕を叩くと、ぴくりと反応して、彼が私を見下ろした。

「私はその顔、凄い格好いいと思うよ?」

基本的に、犬も狼も大好きな私は素直にそう言葉にした。

しかも、銀色に揺れる毛なんて、本当神秘的だし。犬の毛って白か黒が今まで一番好きだったけど、やはり架空の人狼となると銀色ってデフォルト、マジで秀逸すぎる。

思いながら、艶やかに流れる銀色の毛をうっとり見つめてしまった私の言葉を、彼は最初理解出来ないといったように、呆然とこちらを見下ろしていたけれど。

しばらくすると、その銀色の毛がさざなみ、彼は小さく体を振るわせた。

「・・・そんな、事があるわけないだろ」
「いやいや、本当だってば。私は大好きだよ」
「っ!？」

見上げてにつこりと微笑めば、彼の毛がまたふつくらとポリウ
ムを増す。

どういった仕組みなのかは相変わらずわからないけれど、どうし
ても被り物は感情を表現し辛いから、全身で表すという事を考えた
のであるうそれに、私はやはり感動するしかない。

ジーヴィストはそこで黙り込んでしまったのだけれど、彼からは
何処かそわそわとした落ち着かない雰囲気を感じる。

どうしたんだろ？

キャラになりきるのもそろそろ疲れたとか思ってたなり？

それならそうと言ってくれれば、私も素で返すから全然気にしな
くていいのに。

とりあえずこのコスプレキャラになりきるというのは元々相手が
始めた事なので、様子をみようとしてジーヴィストが言葉を発するのを、
周囲の人達を眺めながら待つことにした。

周りからの視線はだいぶ減ったけれど、相変わらず誰も近寄って
こない。

見やすいからいいけどね。

またきよろきよろと辺りを見渡していると、今度は肌を黄色に染
めた人が飲み物を持ってきてくれた。

ツェーザレに言われたらしい。

ありがとうとお礼を言って受け取り、ジーヴィストには一緒に渡
された大きなジョッキグラスを渡す。

そこでふとこの人狼の姿では、飲み辛いのではないかと気付く。
ストローが何かないのかと、黄色の肌をした人に聞こうと思った
時、隣でグラスの口に鼻先をあてふんふんと匂いを嗅いでいたジー
ヴィストが豪快に口をあけ、そこに中身を流し込んだ。

ええっ！？ そのままいつちゃうの！？

中大丈夫か、中は！

想像からして、口の奥に顔があると思っっているので、かぱりと大
きく開けた口から一気に飲み物を流しこんだら、中は大惨事になっ
ているのではないかと本気で焦った。

私の心配を他所に、彼はこぼす事なく大きな口で器用にそれを飲
み干し、空いたグラスを黄色の肌をした人に返した。

そこで私の視線に気付いたジーヴィストが、ん？ と顔を傾ける。

「いやあの・・・大丈夫？」

「ああ、あまり飲み慣れないものだったが、喉を潤すには丁度よか
った」

いや、そんな事を聞いたわけじゃなかったんだけど。

平然としてるように見えて、実は中で全身ジュースマみれなんて
事はないのかな？

後で染み出してきた、その銀色の毛が内側からこの紫の葡萄ジュ
ースに見える色に染まってきたりしないよね？

大丈夫だよな？

ドキドキしながら見つめる私の視線の先では、ジーヴィストは平
然とした様子で、飲まないのか？と聞いてくる。

うんいや、飲むけど。

彼が大丈夫そうなので、とりあえず私も自分のグラスに口を付け

る事にした。

「・・・わあ、美味しい」

数種類の果物の味がミックスされたような独特の甘酸っぱさに気をとられ、飲むと以外に喉が渴いていたことに気付いてごくごくと喉を潤した。

その美味しさに、にこにこしながら飲んでいると、ジーヴィストがこちらを見つめている事に気付き、グラスに口を付けたまま目を向けると、目が合った。

そこでふと彼の大きな口元の、白に近い銀色のふくよかな毛に、飲み物の色がついている事に気付く。

やっぱり、少しは零しちゃうよね。

この大きな口で、飲めただけでも凄いけど。

「ジーヴィスト、ちょっと顔こっち」

小さく手招きすると、彼は素直に顔を寄せる。

鼻先が私の顔につきそうになり、苦笑しながら彼の口元に指を伸ばして、それを拭った。

ついでに反対側は大丈夫かと彼の大きな顔に手を触れたまま、反対側を覗き込むと、そこにも少しだけついていて、同じ様に指先で拭って整える。

「飲み物少しだけ零してたよ。折角綺麗な銀色なんだから、汚さないように気をつけないと」

次はストローもらおうね、と笑うと彼の目が細まった。

何処か嬉しそうにも感じるその顔が、すりつと私の顔に擦り寄っ

てくる。

柔らかな顎の毛が頬を撫り、くすぐったくてまた笑った。くすくす笑っていると、ジーヴィストが更にすりすりとかくついできたので、仰け反りそうになってしまった。

はたから見れば、いちゃついているとも取れるその戯れに、普段の私ならこんな人前でと怒りそうなところだけど、どうにも普段とは違う姿をしている時の自分の心構えと、相手の獣の姿に安心感があるせいか気にならず、わしゃわしゃと彼の毛を撫でた。

そうやって二人でじゃれついている時、ふっと室内の照明が落とされる。

突然の事に驚いた私の肩を、ジーヴィストの大きな手がそっと引き寄せた。

「皆様、本日はお集まり頂き、誠にありがとうございます」

声がすると同時に、会場的一部分だけにスポットライトがあたり、そこでは真紅のドレスを身に纏った女性が艶めかしく微笑んでいた。

おお、外人さんだ。
すっごい美人。

少し離れた場所に立つその女性をよく見ようと背伸びをすると、彼女がこちらを見たようが気がした。

でも目があった感じはしないから、もしかしてジーヴィストを見たのかな、と彼を見上げると彼はまだ私を見つめたままだったので、目が合う。

薄暗い部屋で見る彼の藍色の目は、黒に近く、深みを増して綺麗だ。

そんな目に真っ直ぐ見つめられると、狼だからなのか、何だか食べられてしまいそんな錯覚と、なぜか感じた恥ずかしさから目を伏

せた。

ざわついていた室内が、しんと静まり返ったせいもあるかもしれない。

肩に置かれたジーヴィストの大きな手を意識すると、更にドキドキが増した。

なんか、急に会場の雰囲気変わったから、それにのまれてるよ私。いかんいかん。

軽く首を振って、気を取り直そうと何やら話し続けている女性へと顔を向けると、身を刺すような強い視線で私を見つめている彼女と目があった。

さっきはこっち見てる？ って感じだったけど、今あきらかに彼女は私を睨んでいる。

え？ と疑問を感じた私の視線の先で、彼女の隣に近付いた青色の肌をしたツエーザレが彼女の耳に何か囁く姿が映った。

ツエーザレは楽しそうに目を細めて、私の視線をうけて軽く会釈した。

食事の前の挨拶が何かのようだけど、何か変な感じがする。

コスプレイベントでこんな事は初めてな私は、普段と違うこの趣向によりやく少しの疑問と違和感を感じながら彼らを見つめるのだった。

地を這う獣は不安を覚える

おかしいな？

そうふと思つても、元々自分がいた場所が普段と180度違う場所、普段の自分と全く違う装いをして参加する会場だったら、多少の違和感を感じても、人って何がおかしいのかすぐに判断出来ないと思うんだよね。

元から周囲の皆は知らない人達ばかりで、会場の雰囲気のにまれていたなら、尚更だ。

だから私は、目の前に広がるコスプレ衣装を身に纏った風変わりな人達と、いつの間に用意されたのか祭壇のような床よりも高い位置にある場所へと階段を上る、赤いドレス姿の女性をただただ見つめるのだった。

それにしても、さつき何で睨まれたんだろ。

・・・運営さんに睨まれるような事、何もしてないよね？

少しだけドキドキしながら見つめる先の祭壇の下では、いろんな色にその肌を染めた燕尾服姿の男の人達が、そこを取り囲むように立ち並んでいる。

周囲の興奮して声を上げる人達を制する姿も見えて、スタッフも大変だなと思う頃には、その不安からくるドキドキも消えた。

「皆様、お静かに願います」

ツィエザレの言葉に、会場がしんとする。

「此度の餌には地上で名高い南の大国、自らを神聖王国などと呼称するシーレヌ・トウワスよりお越しいただきました」

彼の言葉に、周囲から嘲笑ともとれる笑い声がさざなみの様に起こる。

私はというといきなり始まったこの芝居がかった見世物に、半ば呆れ気味だ。

流石にここまでくると、ただ二次元の可愛い服を着てみただけの理由でコスプレを始めた私としては、ついていけないというのが本音だったりする。

ある程度は許容できる。でもここまで大仰となると、話は別。むくむくと素の自分が出てきてしまうのだ。

なんか飽きてきちゃった・・・

周りの視線は祭壇のように飾られた舞台上へと注がれている中、私はきよきよと辺りを見回した。

そこでふと先程も見かけた縛られた騎士の人達の姿を発見する。そういえば今、ツエーザレが仰々しく話しているのは彼らの事ではないだろうか。

話の流れから推測するに、彼らはこの後舞台上へとあげられるのだろう。

何をするのか全くわからないし、ご飯はどうなったんだと思う空腹の私としては、気を紛らわす何かがほしくて仕方が無かった。

少しくらい話しかけてもいいかな？

コスプレ会場で見かける一片の汚れもない姿と違い、元は銀色なのだろうが薄汚れた甲冑や半ばまで引き裂かれたマントを背にかけ

る騎士姿の人たちに興味を持ち、私は人並みをぬって彼らへと近付いた。

ちなみにジーヴィストがついてくると目立つので、彼にはそこで待っているように言っている。

彼らは一様に縄らしきもので体と口を縛られている。

青ざめて俯く者もいれば、血走った目で近付いてきた私を睨んでくる者もいる。

コスプレしてるからにはコスプレ仲間と思って間違いないはずなんだけど、彼らの殺気立った雰囲気はただのコスプレ仲間というよりも、本物の・・・そう、役に入りきった役者のようだ。

体を震わせ、縛られていなければこちらに飛び掛らんばかりの勢いで、縛られた口で何かを訴えかけてくる彼らの姿にちよつといやかなり、びくついてしまった。

大舞台前なんだから、こっち来るなとかそんな事言われてるのかな？

興味本位で近付いてきてはダメだったかと、諦めてジーヴィストの元へと踵を返そうとした。

その時。

『待って下さい』

そう、声をかけられた気がして、私は彼らを振り返った。

俯いたり血走った目をした人達の中で、一人だけ正常な意識といえればいいだろうか？ 真っ直ぐにこちらを見つめる整った顔立ちの青年と目があった。

声をかけられたというよりも、頭の中に直接響いてきたような、どこか虫の知らせにも似たような感覚を感じた私は、きょとんとして彼を見つめ返す。

彼もまた口元を結ばれているため、声は出せないはずだ。

気のせいかな？

不思議に思いぱちぱちと二度瞬きした私は、それでも何気なく彼の方へと一歩近付いた。

彼もまた周りの仲間を肩で押しのけてこちらへと這うように進み出てくる。

途中、彼の肩を押し戻そうと顎鬚を生やし眉間に皺をよせた男の人がいた。けれど、私と視線を合わせていた彼は男の人にこくりと頷く事によって、それを止める。

そうして、私のすぐ目の前までやって来た青年に、私は膝をついて改めて視線を合わせた。

理知的な光を宿した黒い目に見つめられ——それも、かなりの美青年となると、私の胸は少なからずドキッとしてしまう。

「あの、それ外してもいい？」

話してみたくて、口元を結ぶ布を指差して問いかける。

ここが只のコスプレ会場というよりも、舞台っぽいものが始まったせいで、何も知らない私と違い何か役が与えられているっぽい彼らの衣装を勝手に外していいのか、判断に困ったからだ。

私の問いかけに、彼は一度頷くと私の方へと更に身を乗り出し、軽く俯くと彼の所々汚れがついた黒髪だったが、前髪はさらりと揺れてその頬に濃い影を落とした。

きつく結ばれているように見えた口元を覆うそれは、思っていたよりも簡単に外れたため、やはり芝居用のためかと思っていると、彼は掠れた声で囁くように言葉を紡いだ。

「あなたは他の者達と違うように見えたので、失礼を承知と声をか

けさせて頂きました」

あれ、やっぱりさっき声かけられたんだ。

縛られた口でどうやって？

そう思ったけれど、彼のどこか切羽詰った様子に領きしか返せない。

「どうかこの中の一人だけでも、逃がして頂けませんか。契約が必要というのなら、私の何と引き換えにして頂いても構いません」

彼の言葉に、先程の顎鬚を生やした男の人が目をむき、焦ったように青年へと肩をこすり付ける。

「解っている。だがこのままでは、皆の安否もユサイヌの地が魔族に支配されている事も国に伝える事が出来ず、同じ事が繰り返されるのだ」

そこで青年は一旦言葉を区切ると、顎鬚の男性へと向けていた視線を上げて、私を見つめた。

「力を示せというのなら、この場を切り抜けた後に、必ずこの身をもつてあなたへ契約の証として示しましょう。どうか」

真摯な黒い瞳で見つめられ、掠れた声で囁くように切に願うような言葉は、普通の人だったら何とかしてあげたいと思うだろう。けれど当の私かというと本気で今焦っていた。

何これ、私もいつのまにか役者の一人になってたの？
全員参加型だったの？

コスプレイベントに参加するにあたっての注意事項やイベント概要がこと細かく書かれた書類は一通り目を通したつもりだったけど、そんな事書いてなかった気がする。

それとも分厚いパンフレットの方に何か書いてあったのだろうか？それだったら、友達が一言教えてくれてもいいはずだけど、いや彼女のことだから何も知らずに焦る私を笑ってやろうと隠していてもおかしくはない。

なんて素敵な友達をもったのだろう。

少しずつ確かな違和感を感じ始めている私の脳内は、それでもそう納得する事にした。

「・・・私に出来る事があるのなら」

差しさわりの無い答えを返すと、青年の目が一条の光を見つけたかのように揺れた。

全く意味がわからないけれど、閻系コスプレ会場で始まった演劇のような催し物の中、私は騎士を救い出すサキュバスキャラという事でこの場を乗り切るべきみたいだ。

だって無視出来ないほど、目の前の彼は真剣な目をしてこちらを見つめている。

後で友達に良かったよと屈辱的に笑われようが、やってやろうじゃないか。

「あの、名前聞いてもいい？ 私のことはユーアって呼んで」

「ユーア・・・私はラティシエルといいます」

「へえ・・・なんか美味しそうな名前だね」

最初のラテの部分だけでそう思った私の呟きに、顎鬚の男性が目を剥いた。

慌てたように、んーんーっと出ない声で懸命に何かをラティシエルに訴えかけている。

「ユーア、時間がありません。我らの胸元には」

「おや、つまみ食いですか？ ユーア」

いきなり聞こえた声に顔を上げれば、肌を青色に染めたツエーザレが、いつの間にかやってきたのかすぐ傍で立っていた。

口元は笑っているのに、その金色の目は細く弧を描いているだけで、何の感情も読み取れない。

これが演技なのか、いや演技だからこそ出来る表情なのかわからなかったけれど、体に嫌な緊張が走る。

運営スタッフ兼、たぶんメイン役者キターツ！

そう、心の中でギャグにでも持っていかなければやっていられない緊張感に満ちた場の空気に耐えられず、自分を落ち着かせるように大きく息を吐く。

「好きな人がいたからちよつと気になって。食事がまだ始まらないなら、摘み食いくらいいいでしょ？」

「そうですね・・・今日は人数もいますし、摘み食い程度なら見なかった事にしてあげますけど・・・あちらで、ジーヴィストが面白い顔でこちらを伺っていますよ？ そちらはいいのですか？」

くくつと喉を鳴らし肩越しに後方を振り返るツエーザレの視線を追って、私も顔を向けると、薄暗い会場でも目立つ銀色の毛を持つ大きな体格のジーヴィストが腕組して、こちらを伺っているのが見えた。

目立つからこっちに来るなという私の言葉を忠実に守っているよ

うだけれど、彼が見ているというだけで、周りの人たちも何事だとかちらを伺っている。

思い切り注目集めてるじゃないかっ！

急に恥ずかしくなり、熱くなる頬に片手をあてて隠した。

とにかく今、素の自分が出てくると、一言もしゃべれなくなることはわかってる。

サキュバスキヤラなら、自信満々に男を誘惑するような感じでなくちゃいけないのに、赤い顔でそんなこと言うなんて、ここまできたら私のレイヤー魂がすたるってものですよ。

「・・・今は目の前のこの人が気になるから、あれは放っておいていいの」

「おやおや、流石といいますが、あなた方の種は目移りばかりだ。今度は非私の事も味見して頂きたいですね。あなたの爪が私の色に染まるのを見るのは、至福の時となるでしょう。あなたが相手して下さるといふのなら、いつでも時間を空けますからね」

ツエザレの言ってる事は半分も理解出来なかったが、そのうちねと笑っておいた。

とにかく台本をくれ、と切実に思いもするけれど、周りも私の適当な言い回しに何も言ってこないし、なりきっていればそれで良さそうな感じが、本当に助かる。

「ところで私大勢に見られながら食事をする趣味は無いんだけど、個室とかないの？」

一旦この人目に晒された状況から逃れたいと、そう訊ねると、ツエーザレは顎のあたりを人差し指でとんとんと叩いてから口を開

いた。

「あちらに並ぶ扉の奥にはベッドルームもご用意してありますよ。このような場には不似合いな方々も多く休んでいらっしゃいますので、扉を開ける際は鉢合わせしないよう、お気をつけ下さい」

そう言つて、ツエーザレが指し示した扉の数は、ゆうに十数を越えている。

その中の何処かは既に誰かがつかつていたりとか、そんな開けてびっくり的なことは勘弁して欲しい。

いわゆる中が見えづらいカラオケボックスのような場所で、中で気の知れた仲間同士で騒いだり休んだりしているところを、知らない人に扉を開けられるなんて、あれほど気まずいものはない。

そう思つて軽くツエーザレを睨むと、彼は楽しそうに微笑んだ。

「冗談ですよ。左から三番目の扉は誰も使用しておりません」

「最初からそう言つてほしかったわ」

「私はユーアの表情豊かなところが気に入ってしまったので、申し訳ありません。本当、あなたの種では珍しい」

確かに、サキユバスつてこう自信に満ちた妖艶な微笑みを浮かべているイメージがあるよね。

うふふ、おほほみたいな。

「私は私だからいいの」

そう言つて立ち上がりかけ、目の前の青年の足も縛られていることに気付いた。

それに手をかけ、やはりするりと簡単に解けた結び目を解くと、ツエーザレが先程までの感情のない笑みと違い、心から楽しそうに

笑みを浮かべえながらこちらを見ている事に気付く。

「何？」

「いえいえ、あなたは本当に面白いと思ひまして」

彼の言葉は本当に意味がわからないと首をかしげながら、目に付いた顎鬚の男の人の足の縄も解く。

青年にはこの中の誰でもいいと言われていたから、何となくさつきから私たちの様子を一番に気にかけていた男性も一緒にと思っただ。

「おや、二人も連れて行かれるのですか？」

体の拘束はそのまま彼らが立ち上がるのに手を添えながら、私は悠然と微笑んでツエザレを振り返った。

「私、最低二人はいないとダメなの」

・・・何がとか、お願い、今は何もつつこまないで！！

ツエザレが行ってらっしゃいませと恭しく礼を取るのを横目に、私は痛い痛過ぎると羞恥に悶えそうになりながら、彼らと共にざわめく会場を横切り、足早に扉の中へと入っていった。

地を這う獣は不安を覚える（後書き）

ジーヴイストはユーアが何をしているのか、そわそわしながら見守っています（笑）

タイトルは彼メインのため、何してるんだ？と不安に思っているということのでつけてみました。

最初は『地を這う獣は出番を待つ』にしようと思いましたが・・・！（笑）

地を這う獣は暇を持て余す

大きな扉の中に三人で入り込み、後ろ手に縛られている男達の代わりに、扉を閉めようとした時、ふとこちらを伺うジーヴィストと目があった。

遠く離れ、薄暗い会場の中でも光り輝く銀色の毛に覆われた彼の大きな体軀は目立つ。

こちらをじっと見つめる狼の相貌が何を考えているのかわからず戸惑ったけれど、周囲の人達からの視線から逃れるように慌てて扉を閉めた。

「はあーっ・・・なんか、疲れた」

閉めた扉の前で、がくりと項垂れて思わず呟いていた。

コスプレしてる時はある程度、人の視線に晒されるものではあるけれど、なんだか今回は本当いろいろ勝手が違い過ぎて、精神的疲労がかなりきてる。

こきこきと首が鳴る事はなかったけれど、気持ち的に少しでも疲労を回復させようと首を回していると、ユーア・・・と戸惑うような声音で名前を呼ばれた。

そうだまだ終わってないんだと少なからずげんなりしながら顔を上げ振り返ると、案の定ラティシエルが困惑顔でこちらを伺っていた。

彼に愛想笑いを返しながら、私はあたりを見回した。

部屋の中は結構な広さで、簡易なソファとテーブルが真ん中に置かれている。

テーブルの上には果物籠が置いてあり、飲み物まで丁寧に用意されていた。

ツェーザレに言われるままに入ってきたけど、もう一つある扉が

ベッドルームになっているという事は、イベントで気分が悪くなった人用に貸し出している休憩室兼救護室というところなのだろうか。でもそういう場所ならそれ専門のスタッフがいてもおかしくないと思うのだけれど、扉の向こうでは大事な舞台っぽいものも始まったようだし、そっちにいつてるのかもしれない。

救護室とかにお世話になった事がない私としては、少なからず戸惑いながら、彼らに視線を戻した。

彼らというか、ラティシエルの前に立ちはだかる大きな壁。

私を射殺さんばかりの目つきで威圧感と存在感たっぷりな、顎鬚の男性にというか。

この人、さつきから役に入りすぎってというか、一体何なの・・・

気後れしつつも数歩彼らに近付き、顎鬚の男性の視線を避けながら、彼の背後にいるラティシエルを覗き込むように口を開いた。

「えーと、とりあえず、ラティシエルって長いから、ラテって呼んでもいい？」

「どうぞ、好きにお呼びいただいて構いません」

「うん。じゃあまずはラテの腕解こうか？」

「・・・良いのですか？」

「いいも何も縛られてるのって大変そうだと思ったんだけど、平気なの？」

私だったら後ろ手に縛られるとか御免こうむる。

「解いて頂けるのは助かりますが、その・・・」

「ん？」

「・・・いえ、お願いします」

ラテは戸惑いを含んだ思案顔で私の前に歩み出ると、ゆっくりと背中を向けた。

彼の態度に対してもやはり不思議に思いながら、先程と同じ様にあっさりと縄のようなそれを解く。

するとラテは不自由だった腕を軽くさすり、ぐっぐつと手の感触を確かめるように動かした。

後ろ手に縛られるなんて、やはり無理な体勢だったのだろう、その腕の感覚を確かめるようなラテの動きを見つめていると、私の視線に気付いた彼が軽く会釈した。

「有難うございます。契約もまだ交わしていないというのに、戒めを全て解いて頂けると思わず、戸惑ってしまいました」

「え？ ああ・・・うん」

そういえば最初から契約がどうのってラテが言ってたっけ。

台本が無く、ある程度はキャラになりきっていればまかり通るとはいえ、この会場で会う人会う人、物凄い自分設定がある人ばかりだと改めて思った。

こっちはそんな事に慣れていないし、ある程度の知識は持つてコスプレに参戦してはいるけれど、そうぼんぼん次から次へと会話を要求されると少し、いやもう本気で困ってきた。

だからといって今更、もうやめようよなどとと言える空気でもないので、契約とやらをキャラ上の設定的に考えてみる事にした。

まあ、あっさりと思い浮かんだけどね。

囚われの騎士をサキュバスが助けるための契約なんて、あは～んうふ～んな事しかありえない。

自分でした想像に、ちよつとだけ口元が引きつりそうになった。

「そんな大した事したわけじゃないし気にしないで。契約とか、私あまり気にしない性格なの」

軽く手を振って笑うと、まだ戸惑いが少し残ってはいたけれど、ラテも納得したように微笑む。

しかし、隣で威圧感たつぷりにこちらを見ていた顎鬚の男性は、眉間の皺を更に深くしただけだった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

思わず、顎鬚の男性と無言で見詰め合ってしまった。

私たちの雰囲気察して、ラテが慌てて私たちの間に立つ。

「ジュレイ、ユーアにそのような目を向けるな」

ラテの嗜めるような言葉に、ジュレイと呼ばれた顎鬚の男性は、怪訝そうな目を今度はラテにぶつける。

「・・・お前の言いたい事は解る。魔族が契約も無しに力を貸すなどありえない、そう言いたいのだろう？」

ラテの言葉に、ジュレイは軽く目を伏せて頷いた。

何処まで細かい設定が、この大雑把ななりきりキャラ演技に組み込まれてるのかわからないので、私は黙っている事に決めた。

「だがここで問答している時間は無い」

ラテの一言に、ジュレイは軽く首を振り、何かを訴えかけるよう

な目で彼を見つめた。

そんな彼の態度にラテは眉を寄せながら小さく嘆息し、彼の口元を覆う布に手をかけた。

外そうとするけれど、なかなか外れない様子に、首を傾げているとラテが呟いた。

「やはり私の力ではこの封呪は解けないか」

何のことだろうと思っていると、ラテと目が合った。

流れ的に外して欲しいのだろうと思った私は、ジュレイに近付き彼の口元に手を伸ばした。

男のラテが外そうとして外れないのなら、女の私ではダメなんじゃないだろうか、今までののは軽く縛ってあったけれど彼のだけキツく結んであるのではないのだろうかと勿論思ったけれど、ラテのよくわからない呟きを聞いていたから、これもまた何かの演技だろうと結論付けたのだ。

「えーつと・・・」

彼もまたジーヴィストまでとはいかなくても、大柄な長身のため、両手を思い切り伸ばさないと彼の口元には手が届かない。

私の行動にジュレイは何故か目を見開いてこちらを見下ろし、私の腕から逃れるように上体を軽くそらした。

外さなくていいって事かしら？

伸ばしていた腕を引っ込めようとしたところで、ラテがジュレイと嗜めるように彼の名を呼んだ。

ラテをちらりと見てから、ジュレイが肩を落とすように大人しくなった。

「・・・外していいのよね？」

「・・・して頂けるのならば」

戸惑いながらラテに問いかけると、彼は神妙に頷いた。

ラテは何処か私の行動を図りかねるような、やはり戸惑いを捨てきれない顔をしている。

そういう顔をずっと続けられると、こちらも段々不安になってくるから止めて欲しい。

推測するに騎士のキャラ設定で考えると、魔族設定である私の無償の行動が信じられないという心境なのだと思う。

そうなるといっそ、先に契約しちゃいましょうとか言った方が、彼らは納得するのだろうか。

どうする？ 思い切って言ってみる？

彼らの言葉に疑問を浮かべながらも動くより、たまには私から仕掛けてみる？

不安を何とかしようと考えた結果、むくむくと好奇心が湧いてきた。

どうしようかわくわくしながら顔を上げると、私を見下ろすジュレイの冷めた目と目が合い、その好奇心は一気に萎んだけれど。

「・・・それじゃあ、外すね」

とりあえずと腕を伸ばすと、彼はゆっくりと腰を屈めた。

彼の口元を縛る布らしきものの結び目に手をかけると、あっさりと解けたのでやはりラテのは演技だったのかと思いつながら、ジュレイがほつと息をつくさまを見つめた。

間近でみる顎鬚を生やした仏頂面は、野性的で男らしい。

睨まれなければ結構いい男かもねと思っていたら、早速睨まれた。白目の部分が多い三白眼の彼に睨まれると怖いから、本気で止め

て欲しいんですけど。

「ラティシエル、何をしている。さっさと逃げろ」

彼は体を起こすなり、唸るようにそう言った。

間近で思い切り睨み上げた私の事なんて、無かった事のようにうた。

まあ、彼からお礼言われるなんて思ってたから、別にいいけどね。

「いやまずはお前からだ。ユーア、彼の腕は解いて頂けますか？」

「さつきから何を馬鹿な事を言ってるやがる！ お前が生きて帰ればそれで済む話じゃねえかつ魔族の気まぐれに縊るのは止めろっ」

「それとも彼の全ての戒めを解くには、流石に契約を先になさいますか？」

ジュレイの苛立ちに満ちた声にびびっているのは私ばかりで、ラテは覚悟を決めた者のみが持つ強い意志を秘めた真剣な表情で私に問いかけてくる。

それは何処かあつさりとした態度にも感じられて、私は目を瞬かせた。

ジュレイのキャラなりきり度というか迫真の演技は、口元を縛られている前から凄いと思っではいたけれど、外した途端に更に熱がこもっているし、はつきり言ってるついていけないというのに、それを無視して私に話をふるラテも本気で止めて欲しい。

「えーと、ほらさつきも言ったけど私は契約とか別に・・・」

「はっ魔族風情が奇麗事を・・・とにかくラティシエル、てめえが逃げろ」

「黙れ。お前を逃がすのが先だ」

「お前を残しておめおめと一人生きて帰れるわけがねえだろうが！」

「ユーア、こうしていられる時間があとどれくらいあるのかわかりません。契約を」

「ラティシエルツ」

声を荒げるジュレイに対して、あくまでも冷静に答えるラテの姿を見つめながら、私は小さく溜息をついた。

お腹が減ってジーヴィストと二人この会場に戻ってきたというのに、自らのせいではあるけれど変な事に巻き込まれたうえに、目の前で会話している二人はそんな私の事そっちのけときている。

また、話してる内容が内容だけにさっぱりわからなくて口出しも出来ない。

でもあえて会話にのるなら、私が一番ここから逃げ出したい。

囚われの騎士設定の彼らが逃げる逃げないの話し合いをしてみるところ申し訳ないけれど、私が今あなた達二人から逃げ出したいです。マジで。

何度もいうけど、本気でキャラになりきられると、段々こっちは素が出てくるっていうか・・・

「もうさ、二人で逃げればいいじゃない」

言うなり、ジュレイの傍に寄ると彼の腕を縛り付けている縄らしきものを解いた。

啞然としている彼らには悪いけど、会話の内容もよくわからないし、何よりなんか疲れた。

ここは気分的に思い切りソファにどっかりと腰を落ち着きたいところだけれど、腰についてる飾り羽根が壊れたら困るので、私はソファ近くまでずかずかと大腿で近付くと、テーブルの上に置かれた葡萄を手に取り、行儀が悪くなってしまっけれど、膝立ちのような

格好でソファの上に乗り上げた。

そして、ソファの背もたれに腕をついて、そこに顎を乗せて、呆然とこちらを見ている彼らに小首をかしげて微笑んで見せた。

「譲り合う精神もいいと思うけど、客観的に言わせてもらうなら時間の無駄ってものでしょう？」

言いながら手に持った葡萄の美味しそうな一粒を房からちぎり、口に入れた。

種のないタイプのそれは瑞々しくて美味しい。

「悩んでる暇があるなら、さっと二人で、ね？」

そして、仲良くまた新たなコスプレ仲間を見つけて下さい。

私はここで一休みしたら、また会場に戻ってジーヴィストと更に親睦を深め、新しくレベルの高いコスプレ衣装を手に入れるのだ。

もう知らないと投げやりな気分の私の前で、ラテが自分の胸元の辺りを握り締めながら、ためらいがちに口を開いた。

「・・・我らが二人いなくなる事で、ユーアにお咎めは無いのですか？」

「んー、それはわかんないけど・・・」

この小芝居がどんな話しになってるのかさっぱりわからないけど、まあ何とかなるだろうと笑ってみせた。

だって実際、ここまで何とかなってるんだもの。

これからも何とかなるだろうと安易に思ってしまうのは、仕方ない事だ。

「本当に契約はいらねえって言うのか？ 魔族が無償で俺たちを助

けたうえに、見逃すって？」

ジュレイが初めて私を見て、ちゃんと話しかけてきた事に、おつと少なからず感動した。

内容はまあ、置いとくとしてだが。

「最初から契約なんて別にどうでもいいって言ったでしょう？ 元々ただ暇つぶしにあなた達に話しかけただけだし、それに、ここにもちよつと疲れたから隠れるつもりで入ったようなものよ。でもまあお腹が空いてるのは確かだから、契約とかよりも何か食べ物くれた方が良かったわ」

私の言葉に、ジュレイは眉間に皺を寄せてぐつと口元を引き締めた。

何か考えているようだったけれど、疲れた私はこれ以上彼らをフオーする気にはなれなくて、手元の葡萄をいくつか口に運ぶ。

葡萄の汁で濡れた指先を、ぺろりと舌先で舐めてからふと顔を上げると、何故か目尻のあたりを赤く染めぼんやりとした表情のラテと目があつた。

いきなりどうしたと思ったけれど、なんだかその顔が可愛く見えて、もうすぐお別れになるだろう彼らとの演技に最後まで付き合っただけでもいいかという気分になり、目を細めてふふつと笑ってみせた。

「そうね、ラテとジュレの食べ物コンビで、私を楽しませてくれた方がずっと嬉しいかも」

地を這う獣は暇を持て余す（後書き）

ジーヴイストは無言で会場の柱に寄りかかって、ユーアがいる部屋の扉を

見ていると思われます。ごめん、ごめんよ……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5073u/>

地を這う獣は甘い夢を見る

2011年7月16日03時23分発行